

平成二十九年 度 自己推薦入学試験「小論文問題」

次の文章を読み、あなたの考えたことを六〇〇字程度で述べなさい。

「皆さんは勉強を楽しいと思っていますか？」

日本の子どもたちにこの質問を投げかけたら、きっとほとんどの子どもが「No」と答えるでしょう。ランドセルを買ったばかりの頃は、「小学校に入ったら、お勉強をするの」と楽しみにしていた子どもたちなのに、なぜか学校に通ううちに勉強が面白くなってしまおうようです。

何が勉強嫌いにさせてしまうのでしょうか？

では、同じ質問を大人に投げかけてみます。

やはり答えは「No」でしょう。

「いや、勉強はあまり好きではなかったからね……」

でも、勉強を「学ぶ」と置き換えて、「学ぶことは好きですか？」と大人に聞いてみると、おそらく「Yes」の答えが圧倒的に多く返ってくるはずですよ。

私たちはどうも「勉強」という言葉に何枚も何枚も「面白くない」というレッテルを貼って、思い違いをしているようなのです。

「学ぶ」と「勉強する」は本来きわめて近い意味なのに、「勉強」になると途端に、無理やりやらされるもの、つまらないもの、というイメージに変わってしまうのです。

「学ぶこと」とは、新しいことを知ること、すなわち楽しいこと。そこに「自分の好きなものを」「自分の自由で」という要素が絡んでいるから、「好き」と言えるのかもしれない。

しかし「勉強」とは、自分の好奇心とは関係なく義務として課せられるもの、そしてそこに評価が加わるもの、という解釈です。

また、勉強を好む者は面白くない人間である、という極端に間違ったイメージさえ、子どもの社会にはできているように感じます。

もしかしたら、心の中では「勉強は楽しい」と思っている子どもはたくさんいるのかもしれませんが、そのようなことを口に出すのは、なぜか日本のカルチャーではご法度になっているのです。

何か勉強に関することを好きだと言うと、おかしな目で見られる。変わり者と言われる。そんな不思議な、独特のカルチャーです。

それがまた、勉強に対するネガティブ要因を増やしているのかもしれない。